

# 国際演劇交流セミナー2014 ロシア特集Ⅰ

【ダイジェスト版】

ロシアで最も重要な演出家 セルゲイ・ジェノヴァチ による

“次世代を担う若手演劇人のための” ワークショップ

現在ロシア演劇界で最も注目されている演出家の一人、セルゲイ・ジェノヴァチ氏による東京・名古屋の2都市開催ワークショップ。東京ではドストエフスキー作『白痴』、名古屋では同作家の『カラマーゾフの兄弟』を題材とし、作品についての理解力、役の創造へのアプローチなどを深めながら、その一部を取り上げ集中的に読み解いていく。演出家および俳優の自由な想像力、空想力、創造力を高めることを目的とした。ロシア演劇についての様々なレクチャーも交えながら、舞台という虚構に生き生きとした生命を吹き込んでいくプロセスを体験しながら学んだ。

企画：丸地亜矢

○ 講師 セルゲイ・ジェノヴァチ

【in 名古屋】会場：損保ジャパン人形劇場ひまわりホール

2014年7月11日(金)～13日(日)

7月11日(金) 18:00～21:30 / 12日(土) 12:00～18:00 / 13日(日) 12:00～18:00

【in 東京】会場：芸能花伝舎

2014年7月15日(火)～19日(土)

7月15日(火) 11:00～16:00 / 16日(水) 11:00～16:00 / 17日(木) 11:00～16:00 / 18日(金) 11:00～16:00

19日(土) 11:00～17:00



○ 講師プロフィール



## セルゲイ・ジェノヴァチ Сергей Женовач

1957年生まれ。ロシア、クラスダナル文化大学演出学部を卒業後、クラスダナル青年劇場で指導。1983年ロシア舞台芸術大学 GITIS 演出学部に入學。ピョートル・フォメンコ氏の指導を受けた後、同教授のアシスタント教員として勤務。現在同大学演出学部教授。1988年より、スタジオ劇場「チェロベク」マーラヤ・ブロンナヤ劇場、フォメンコ工房、ロシア国立マールイ劇場、チャーホフ記念モスクワ芸術座等で演出作品を発表。また、彼自らが芸術監督を務める「舞台芸術スタジオ」はモスクワの人気劇場のひとつで、連日多くの観客を集めている。

主なレパートリーは、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』を劇化した「少年たち」「兄イワン・フョードルビッチ」、チャーホフの短編を劇化した「手帳」「三年」、ゴーゴリ『賭博師』など。

老舗劇場である国立ロシア・マールイ劇場、モスクワ芸術座に於いてもグリボイエドフ『智慧の悲しみ』、ブルガーコフ『白衛軍』、モリエール『病は気から』などの古典作品を演出して好評を得ている。

## ロシア特集Ⅰ【名古屋】

ワークショップ 一日目 7月11日（金）

**ジェノヴァチ** 今年もまた日本に来ることができて嬉しく思います。去年参加された方も、新しい方も私と一緒に、このワークショップでドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（原卓也訳、新潮文庫）を題材に分析しましょう。日本ではロシア演劇というとドストエフスキーよりもチェーホフが取り上げられることが多いと思います。ドストエフスキーは戯曲を書いていません。しかし彼の作品はとても演劇的です。非常に賢明な、哲学的で深い作家です。



.....

**ジェノヴァチ** ワークショップに入る前に、少し話をさせてください。ロシア演劇は、心理演劇と深く結びついています。それはなぜかというところとドラマトゥルギーと深く関わっているからです。前回もスタニスラフスキーの話をしました。今回も話したいと思います。スタニスラフスキー自身は何一つ新しいものを生み出したわけではありません。彼が、優れた、経験豊かな俳優の良い部分をもとにまとめていったものがシステムとして現在に伝わっています。舞台上でどうしたらいかに真実を与えることができるかを考えました。俳優の才能、能力を最大に生かすためには勤勉に努力することが必要であり、自分の身体や、能力を訓練しなければなりません。私が思うには、スタニスラフスキー・システムは万能なシステムとして頭の中だけで考えられたものではなく、経験から生まれたものであり、舞台上の俳優になくしてはならないものです。主にヨーロッパの素晴らしい演出家、俳優たちはスタニスラフスキー・システムなしで作品を作ることはありません。

もし、不条理や超現実主義（シュールレアリスム）などのジャンルでも演劇をすることがあるとしてもスタニスラフスキー・システムが有機的に関連している。俳優の本質を引き出すことが必要です。聞くこと、見ること、感じることができなければいけません。スタニスラフスキーはリアルズム演劇と言われているが、私はそうではないと思います。彼は演出家であり、不条理、コメディ、心理劇など様々なジャンルの芝居を演出しましたし、また彼は素晴らしい俳優でもありました。

ブレヒトがロシアを訪れた際にスタニスラフスキーが演出した『熱き心』（オストロフスキー作）の公演を見て「まさに私がやりたかったことだ！」と言っています。また、スタニスラフスキーの弟子たちには様々なタイプの演出家、俳優がありますが、彼らは皆それぞれの個性で輝きを持っていると同時に、スタニスラフスキーの教え（根底）も持ち合わせています。

例えばメイエルホリドはアバンギャルド的な演出家として有名ですが、彼もスタニスラフスキーの愛弟子の1人です。メイエルホリドの演出は鋭敏で、派手な舞台ですが、彼の舞台に出演している俳優たちは誇張された舞台の中で有機的に存在しています。他にもワフタンゴフや、ミハイル・チェー

ホフが有名な弟子としてあげられます。ソビエト時代の演出家ではリュビーモフ、エーフロス、トフストノーゴフがいます。他にもたくさんの演出家たちがスタニスラフスキーのシステムをもとに活躍しています。

ヨーロッパでスタニスラフスキーの影響を強く受けている代表的な演出家ですと、ストレーレル、ブルックなどです。スタニスラフスキー・システムは、ドグマでも、凝り固まったものでも、退屈なものでもありません。システムは才能や、能力のある人たちのために作られたものです。才能のない人にはシステムは役に立ちません。潜在的に隠れている才能を開花するためのものです。

スタニスラフスキーが亡くなってから随分経ちましたが、彼の死後もシステムは途絶えることなく現在も発展しています。現代演劇もシステムに逆らうのではなく、うまく融合させ豊かな舞台を作り上げています。代表的なのがポーランドの演出家グロトフスキー、フランスのアルトーです。スタニスラフスキー・システムは万能なシステムであると思います。繰り返して言いますが、スタニスラフスキー・システムはドグマではありません。

常に探求し続けました。ある時には否定し、新しい方向性を見出そうと研究を続け、最後まで決まったやり方を確立することはありませんでした。しかし、スタニスラフスキーは私たちに演劇への道しるべを教えてくださいました。私たちはシステムにそれぞれの個性を生かして進んでいけるようになっています。どういうことかということ「舞台上での行動」の研究です。俳優は舞台上で生き生きとした人物として自然に存在、行動できる能力、技術が必要です。舞台上で、演じる作品の登場人物として生きることです。心の中まで登場人物になりきることです。

私たちは普段の生活の中でお互いに影響し合いながら生きています。笑ったり、泣いたり、感動したりしています。生きるために行動し、私たちには課題があり、目的があります。

けれどもなぜか観客のいる空間で、舞台の上に立つとみんなに気に入られたい、うまく見せたいという気持ちから緊張してしまいます。大げさ飾り立ててセリフを言ったりしてしまいます。不条理演劇、シュールレアリスム演劇、他の演劇でも言葉にすぎません。いかなるジャンルの作品でも舞台上が生き生きとした場所であれば芸術ではありません。そのためには観客に見られている状態でもお互いに「見ること・聞くこと・感じること」が必要です。スタニスラフスキーと弟子たちは舞台上という条件の中でどうしたら良いか、分析する能力、普段の生活のように舞台上で存在できる能力を育てることを試みます。今回のワークショップで使用するドストエフスキーや、他の作家の作品でも同様ですがいくつかの専門用語が必要になってきます。

その用語は「事件」「行動」「与えられた状況」です。

「事件」とは今、私たちの目の前で起こっている出来事であり、私たちに影響しているものです。演出家も俳優も、まず最初にどんな事件（出来事）があり、何が起こっているかを探してください。登場人物のセリフを分析するのではなく、なぜそのような行動をするのか「事件」を探し出し分析してください。もし、正しく事件とその事件の状況を分析できたのであれば、「行動」への一番近道になります。

「行動」とは働きかけです。「行動」とはパートナーです。舞台上の相手の行動を変化させる試みです。それは自分の役の行動ではなく、相手役の行動を促すものです。相手が泣くように、笑うように仕向けるのです。演じる（考える）のではなく、その場に存在（生存）しなければなりません。どんなジャンルの舞台であっても同じです、真の舞台でなければなりません。

舞台上の行動とは、パートナーへの働きかけであり、状況によって決まってきます。状況とは登場人物に影響を与えているものです。スタニスラフスキーは状況を大きく3つの輪に分けています。1番小さな「第一の輪」、2番目に小さい「第二の輪」、そして1番大きい「第三の輪」です。

今、ここで何が起きているのか、どういう状況なのかということです。

「事件」について。まず、戯曲の中の「事件」を探し出し、「事件」の鎖を作ります。何が起きているか？ 例えば『カラマーゾフの兄弟』を読みます。あるシーンで「事件」が起こり、そのために登場人物の行動がどのように変化したかを分析します。「事件」とは登場人物たちの運命の変化です。物語の最初と、「事件」の後では登場人物たちの状況に変化があるということです。例えば、他人同士が出会ったことにより、仲が良くなった。親友同士が喧嘩して2度と会わなくなったなど。「事件」の知覚をつかんで把握することが大切です。

「状況」を解剖し、「事件」にどのように影響しているかを知ることで作品のジャンルを知ることにもつながっています。「状況」をより鋭敏にすることもできます。今は夏です。今、エアコンが壊れていて使えない状況だとしたら、暑くて、息苦しい状態ですよ。そうするとみなさんの心身の感覚が変わってきますよね？ ワークショップの時間が4時間あるはずが、1時間だけになってしまったら私たちのスピードも、テンポもずっと変わりますね？ 演出家は状況を精選し、鋭鋭化します。大切なのは私たちの目の前で「事件」が起き、登場人物たちに変化が起こることです。白だったものが黒になり、青だったものが茶色になる。劇的に変化する様子が大切です。

ロシアの演劇大学では、入学したばかりの生徒たちは、第一に舞台上でも自然に振舞えるようにします。特に他人に見られているときに、わざとらしい演技にならないように、俳優としての要素を解放しなければなりません。人前に立っても、気取らずに、ありのままを見せることができなければいけません。俳優は観客の反応に惑わされてはいけません、俳優が見ている観客に影響を与えるのです。普段私たちは自由に、普通に歩いていますよね？ しかし、人前で歩かなければならないとき、体が硬くなってうまく歩けなくなると思います。それは、自分が他人にどう見られているか、よく見られたいという思いが働くからです。俳優の本質（自然）とは人前でも、人前でないときと同じように振舞うことができなければなりません。

今、舞台の上で何をしなければいけないのか？ 今、何のためにここに存在しているのか？ 今、この「事件」で何を見出そうとしているのか？ そうすると、舞台の状況の中で生きること、行動することができると思います。才能のある俳優であれば、観客はその舞台を見て、その俳優から目を離すことができないと思います。俳優は、登場人物の人生を、彼らの言葉を語り、行動します。しかし、演じている俳優も登場人物の言葉を聞きながら舞台上に存在しています。彼らの行動を見て、聞いて感じています。受入れて、働きかけているはずで、昂揚して顔が赤くなるかもしれません、蒼白するかもしれません、身体が震えるかもしれません。どんなスタイルであれ、ジャンルであれ生きていなければなりません。生きたプロセスとは、「事件」を知覚し、「行動」を探し、「状況」を解剖することです。

「事件」に対しての受け止め方は個々で違います。そのため個々で状況を見極めてください。これはあまり重要ではないとか、これはとても重要なことだなど。しかし、最も大切なのは舞台上で存在することです。もし、一度でも舞台上で存在することができたのであれば、それ以外のことはできなくなります。他のやり方は嘘だと感じ、できなくなるでしょう。偉大な天才的な俳優には生まれつき備わっています。スタニスラフスキーは「私のシステムは天才には必要ありません。天才は自分でできるからです。しかし、天才ではないけれども才能のある人にはとても有効です。俳優の本質（自然）を発展させます。そのためにシステムがあります」と言っています。スタニスラフスキーと弟子たちは沢山の身体訓練（トレーニング）をまとめます。例えば、想像力、空想力を豊かにする、身体をうまく使う、話言葉や力の使い方など。中でも一番大切なのは即興です。即興をしたことがない人にとってはとても難しいことです。

いくらセリフを全て覚えて、役に合った衣装を身につけて照明や、舞台セットで飾られた舞台に立ってセリフを声に出して言っても、舞台上で存在することができなければ、生きた舞台とはいえません。

俳優の演技の本質（自然）とは即興です。あらかじめ叙述性のない即興です。このスタニスラフスキーの即興を発展させたのが、ミハイル・チェーホフです。即興は俳優の本質（自然）の教育であり、役作りの教育でもある。例えば一番簡単な即興のトレーニングです。2つのポーズをとります。1つ目のポーズはじっと椅子に座っている。2つ目のポーズは驚いて走っていく。この2つの間の動きを考えてください。何が起きたのか？ どうしてそうなったのか？ 一人でも、数人でもできると思います。

最初に舞台に立ったときは、どうしたら良いか分からないと思います。すぐに想像力が働かないかもしれません。考えて何か思いつこうとします。努力し、何かを思いついたら内面が動き始め事件を分析し、事件、行動を探し始めます。俳優の本質（自然）が働きます。

現在のドラマ劇場は、戯曲や、作品に沿って演じる場合は、作者から提供されています。稽古中にミザンセーヌや、リズムなどが決まってくるが、即興は自由な感覚を与えてくれます。舞台上で何度演じて、何回セリフを言っても、毎回初めてのものでなくてはなりません。

トレーニングの例です。何か好きなリズムを取ってみてください。私は3秒間座ります。その後、急に立ち上がります。そして10秒後にまた静かに座ります。このリズムを何度も繰り返すことができます。動きは毎回同じですが、毎回違います。しかし、この動きを毎回機械的にやってしまっはいけません。なぜかという動きを繰り返すだけになっているからです。目の前で何も繰り返されられていないからです。みなさんも何か自分の動き、リズム、思考を取り入れた動きをしてください。何度か繰り返してやってください。俳優の本質（自然）があれば、毎回何か少しずつでも異なっているはず。これがドラマ演劇の本質、ドラマ演劇の演技です。

何年間も上演されている作品で、舞台も、照明も、立ち位置も同じでも毎回新しいものでなければなりません。今、目の前に生き生きとした演技をしている俳優を見たならば、目の前の状況を私は信じてますが、わざとらしい芝居染みた演技をする俳優であれば信じることはないでしょう。スタニスラフスキーのアプローチはどのように有機的な道を見つけるのかということです。例えば、舞台上で愛の告白のシーンがあったとします、観客席の中には私の妻や両親、私を支持する人もいれば、私を支持していない人もいます。こういった環境の中で私は緊張します。けれども舞台上の出来事に集中していれば客席は気にならないはず。私は舞台の上で繰り返されていることに注意し、没頭します。与えられた状況を信じてことです。

もちろん自己コントロールできなければなりません。今も、誰かがあくびをしたり、視線を落としてノートを取っている人、何か考えている、微笑みながら頷いているのも見えています。舞台の上に立っている人は自由でなければなりません。舞台上の俳優が今、何を考えていたか、何をしていたか知ることができます。どういうことかという、舞台にいた俳優に直接聞いてみてください。悪い俳優は、自分の感情に酔って、何をしていたか、何を見ていたか、何を話したかも分かりません。良い俳優は、自分のパートナーがどのように演じていたか、私が発したセリフに対してどのように答えたか、観客はどう反応したか、それに私はどう動き、相手もどう動いたということが分かっています。これこそ生きた演劇と言えるでしょう。

スタニスラフスキー以前にも、生きた演劇は存在しましたが、彼のようにシステムとしてまとまっていませんでした。また、常に研究し続けていました。スタニスラフスキーが晩年に最後まで追求し、まとめることができなかった要素がいくつかあります。「身体的行動のメソッド」もその一つです。

現在は科学的にも立証されています。人間の身体的行動の生活（人生）は、精神的な状態と深く関わっています。お互いに切っても切れない関係です。

精神的な生活（人生）のことをだけを考えるとコントロールできなくなります。なぜかという、人間の精神、心理にはまだ謎がたくさんあります。

しかし、身体的な生活（人生）はある程度コントロールすることができます。スタニスラフスキーは「もし、正確に、忠実に身体的行動を連鎖して分析できるのであれば、内面の精神的、心理的状态も表面化してくるでしょう」と言っています。

みなさん想像してみてください。今、秋の森の中にいるとします。少し寒いです。落ち葉が地面にあり、風が吹いています。突然、サウナの中になると想像します。サウナの中は暑いです。もし、みなさんの想像力が豊かであれば、秋の森の中にも、サウナの暑くて、蒸し蒸しした状態を感じて汗が出てくるでしょう。そして、今度は窓ガラスの割れた部屋の中にいるとします。外から冷たい風が部屋の中に吹き付けます。冷たい風を感じる事ができれば、ブルブルと体が震え、鳥肌が立つでしょう。

スタニスラフスキーも、ミハイル・チェーホフも身体的気分のトレーニング法をたくさん残しています。もちろんすぐ上手に感じることはできないと思いますが、日々の努力も必要です。もし与えられた状況を信じて、理解することができれば、正しい方向に向かうことができるはずですが、俳優は、舞台上で登場人物の役の感情と同様になることができます。それこそスタニスラフスキー・システムの真髄です。

『カラマーゾフの兄弟』のミーチャを演じる俳優は、自分の感覚を上手くコントロールし、相手の俳優と共にお互い「見る」、「聞く」、「感じる」の三大要素を使い演じること、俳優の身体、感情を使い、想像の世界を、さも存在しているように見せる芸術家です。観客はそれを見て泣いたり、笑ったりがっかりさせたりします。観客は自分の考えと、登場人物の考えを重ね、目の前でくり広げられている世界に引き込まれます。

## ◇◇ 休 憩 ◇◇

**ジェノヴァチ** 続けましょう。日常では、私たちはごく自然に振舞って交流していますね。しかし、舞台上になると公開の場ですから、色々と問題が生じます。スタニスラフスキー・システムはロシアだけでなく、ヨーロッパをはじめとし全世界に広がっています。どのように舞台上で繰り広げられている世界を、本当の世界のように観客の心を掴んで魅せるかです。スタニスラフスキー・システムは手段です。才能ある俳優はシステムを活用し、自分自身で、テーマを見つけ進んでいくでしょう。

今、誰かがくしゃみをしましたね。ロシア人は反射的にくしゃみをした人に「お大事に」と言います。誰かと会話することも難しいことではありません。日常生活ではごく自然なことです。しかし、舞台上ではセリフを話している俳優は積極的に、アクティブに動いていますが、黙って聞いている俳優は立ったまま消極的です。よくある光景です。

実際に生活の中では、話している人よりも聞いている人の方が生き生きとしていることがあります。それはどういうことかということ、どのように聞いているのか？ どのように見ているのか？ どのように受け止めているのか？ があるからです。そして、今、聞いている答えを探しています。このようなトレーニングを有効的に考案したのが、弟子のA.D. ポポフです。俳優がセリフを話していないとき「沈黙のゾーン」と言います。天才的な俳優であればすぐにできるでしょう。なぜならば、天才的な俳優は相手のセリフを聞いて感じて受け止めているからです。彼にはシステムは必要ありません。

スタニスラフスキーは「私のシステムは、すぐに上手くできない俳優のためにある」と言っています。

また、ネミロヴィチ・ダンチェンコは「沈黙のゾーン」の最中に生じる要素として「内心のモノローグ」という専門用語を用いました。どういうことかということ、今、みなさんは私の話を聞いています。みなさんは黙っています。このとき、みなさんの心の中では「内心の言葉」が生まれていると



思います。声に出して言わない、心の言葉が生じているでしょう。話を聞いていて、受け入れられること、受け入れられないこと、または、先ほどの話にこだわっている人。ごく自然に生まれていますよね。しかし、舞台上では今から相手のモノローグが3分間ある。終わるまで待とう。やっと終わった。自分のセリフを言う。これは良いことでしょうか？ 自分自身にも、相手にも有効的なことではありません。舞台上の流れを止めている原因になっています。

普段の生活の中で観察してみてください。今日、家で夕食を家族で食べる際でもいいです。誰がいて、どんな会話があったか、誰がどんな話をしたか、どんな受け答えがあったか、誰がよりたくさん話をしたか、なぜ沈黙していたか、それはどうしてか？ これらのことについて観察し、分析してみてください。私たちにとって一番の先生は人生（生活）です。

次のテーマに移りましょう。俳優を育てるということについて。一番大切なのは俳優になろうとしている人の本質を壊さないことです。まず、何ができて何ができないかを知ることです。ある人は音楽的な才能を持っていますが、小さな声しか持っていない。とてもエネルギッシュで、迫力があっても音楽的センスが全くない。おとなしくて、恥ずかしがり屋だけど内面の人生、感情がものすごく豊かだったら。これから俳優になろうとしている人たちと見て、できること、得意なこと、できないこと、苦手なことを知ることが必要です。できることに対しては能力を持っているので、できないことを克服できるように導いてあげることです。

悪い教育者の例としては、出来ることしかさせないことです。出来ないことを克服させないのは良くありません。演劇とは集団、アンサンブルの芸術です。良い集団でなければなりません。才能のある人が多ければ多いほど、意識を高く持っていくことができるでしょう。しかし、才能のある俳優が

少なければ、意識が低くなっていってしまいます。半数以上、才能のある俳優が集まっていれば、才能の低い俳優たちも彼らを見習って伸びていくことができるのです。また、良い教育者はこのようにしなさいとは教えません。短いワークショップの期間の中で俳優を育てることは出来ません。しかし良い方向にエネルギーを導くきっかけを与えることはできるでしょう。コンプレックスや、特徴、凝り固まった常識を気づかせることも重要です。短い期間でも得られたものがあれば、それを追求していくことができるはずで、教えることはではなく、教わることです。教えるのではなく、どうしたらできるようになるのかを考え雰囲気作りや、エネルギー源、可能性を広げる、気づききっかけを与えるのです。ただし、必要以上の情報を与えすぎないでください。受け入れられる限度も考えなければなりません。今現在の状況から、成長するのが大切です。一番大切な事は状況を即興で学ぶことができることです。登場人物の動きの図が即興でもできることなのです。

今日でも舞台上でセリフだけが交わされる劇場がありますが、このような公演は面白くありません。良いお芝居とは俳優が役だけを演じるだけでなく、戯曲全体を演じることです。スタニスラフスキーは「俳優は自分のセリフだけに注目するのではなく、相手のセリフ、戯曲全体に書かれていることを理解し、感じていなければ行動することはできない」と言っています。





俳優を教育するとき、魅力を秘めている人材を探すことも重要です。舞台上で登場人物として存在することができなければなりません。セリフを情熱的に語っている俳優よりも、隅っこで黙っている俳優の方に目がいくことがあると思います。それは、その俳優に舞台上に存在する効果があるからです。役として舞台上で生活しているからです。もちろん、戯曲の流れや、その場の臨場感、リズム、想像力等も必要ですが、教えられるもの、教えられないものがあります。教育する立場であれば、才能ある人たちを選び出し、教育するというのも大切です。機械的な演技ではなく、即興性のある生きた想像プロセスができる、俳優の本質（自然）を持った人材でなければなりません。

舞台上で緊張を取り除くにはどうしたら良いのでしょうか？ まず、自分の本質をすることです。自分の俳優の本質は何に反応しているのか？ 個々で違うと思います。舞台に登場する際に、みなさんそれぞれ緊張の仕方が違うでしょう？ ある俳優は舞台上で身体を動かすため、柔軟、逆立ち、バック転をして身体を十分に準備するでしょうし、よく話すおしゃべり好きな役であれば口の動き、声などを重点的に準備するでしょう、また楽屋にこもって注意力を高めるため、一人で集中する人もいます。自分がどのタイプなのか知ることも必要です。興奮と神経過敏を間違えないでください。神経過敏になっているときはよくない状態です。けれども適度な興奮は必要なことです。もし舞台に立つ前に、完全に冷静な状態であればそれもよくありません。俳優は常に適度な興奮状態でなければなりません。

不条理演劇についてですが、舞台上での心身の感覚が大切です。不条理だからうまくいかないというのではなく、俳優本人の問題です。これはどんなジャンルの演劇にも当てはまります。創作過程でうまく進んでいけないために問題が生じるのです。もし、作品や創作に魅力を感じているならば、俳優本人の関心が高いはずで、演出家の説明、ミザンセーン、パートナーとのやりとりがうまく進行し自分の興奮が心地良い状態で保つことができれば、俳優は芸術家です。うまくいかないときは何かうまくいっていない状態です。もしくは与えられた役がその俳優に合っていない、演出家もどうすることもできない場合もあり得ます。俳優に才能がなかったのではなく、波長が合わなかったのです。作家や、ジャンルが問題なわけでもありません。

今までの話の中で何か質問はありますか？

**参加者** 3つの輪についてもう一度話してください。

**ジェノヴァチ** 大きな輪というのは私たちに間接的に影響を与えているものです。次に中間の輪です。私たちに影響を与えてはいますが直接ではありません。小さな輪は私たちに直接影響し、行動を起こさせるものです。登場人物の行動を見つけるのは大変な作業です。行動にはどんなものがありますか？ 身体的な行動、言葉による行動、心理的な行動、論理的な行動、感情的な行動などありますが最終的に内面の心（魂）の行動をつかみとらなければなりません。舞台上で役と俳優が一体化すること、役を知ることが必要です。行動を見つけるために小さな輪が非常に役立ちます。小さな輪から行動を見つけてください。

『カラマーゾフの兄弟』のミーチャが刑務所にいます。刑務所とはどの輪にあてはまりますか？

私は小さな輪だと思います。裁判まで7、8時間ほどしかありません。殺人罪に問われています。1分、1秒が大切な時間です。少し前にラキーチンが面会に来て人生について話をしました。この会話によって今のミーチャの状況が明確になっています。全て小さな輪で起こっています。スタニスラフスキーはみなさんにアプローチの方法を提示しています。

スタニスラフスキーはドグマを作ったのではありません、凝り固まった考えではなく、発展するためにシステムをまとめたのです。彼のシステムをもとに現代の演出家、俳優もシステムも発展し続けているのです。

みなさんはこのワークショップのために『カラマーゾフの兄弟』を読まれたと思います。今回は「第11編 兄イワン・4 賛歌と秘密」について進めていきたいと思います。刑務所にいるミーチャと面会に訪れたアリョーシャのシーンです。去年は、この前のシーンをワークショップで分析しエチュードを試みました。アリョーシャがリーザと会話をし、彼女の家を出てミーチャのところへ向かうのです。明日までにもう一度読み直してください。ミーチャ・カラマーゾフについて知りたければ「熱烈な心の告白」のなかにミーチャと、アリョーシャが飲み屋でコニャックを飲むシーンがありますので時間があれば目を通してください。

ではまた明日。

◆ ◆ 一日目終了 ◆ ◆

## ワークショップ 二日目 7月12日(土)

**ジェノヴァチ** みなさんこんにちは。「第4章 賛歌と秘密」は読めましたか？ 今から配役を決めてみなさんで読んでいきましょう。読む前にみなさんにお願ひがあります。落ち着いてゆっくり読みましょう。一番重要なのは急がないことです。本を読むとその光景が浮かんですぐに演じようとしてしまいますが、演じないでください。どんな印象を持つのか、でもまだその印象にとらわれないでください。一回目に読むときは、まだ分からないことが沢山あります。段階を経て少しずつ本文の内容を理解していきましょう。行動を見つけ、事件について分析しましょう。よくある間違いは、言葉を分析することです。事件を分析するのと、言葉を分析するのでは何が違うのでしょうか？ 事件は登場人物が何を考えて、なぜそのような行動をとったのかを分析できますが、言葉の意味を分析するのは、一つの言葉の意味に過ぎないのです。登場人物の話す言葉が表面上と内心とが一致せずに違うときがあります。もしくは思っていることと反対のことを話していることもあるでしょう。例えば、今日は睡眠が足りていないのに「ぐっすり眠ったよ」と、嘘を話すこともありますよね。事件を分析することによって、言葉の意味も明確になります。

俳優の仕事で難しくもあり、興味深いのは作者が書いたセリフのトーン（音色）を正しく見つけることです。アリョーシャや、ミーチャに何が起きて、どのような状況でどんな会話をするのか理解できなければいけません。行動は言葉と同じ平面上にはありません。行動は常に言葉と交差しています。しかしそれを理解していない俳優は言葉だけを演じてしまいます。どんな事件が起こっているか分からずにセリフを話してしまう場合は、セリフを飾り立ててしまいます。セリフを強く発したりするのも同じことです。しかしどのような状況で、心の中でどんな葛藤があるのか知るためには、状況を理解していなくてはなりません。状況を理解するためには、疑問を投げかけるのです。演出も、俳優も、疑問、質問が多いほど良いのです。この段階では答えを出すのではなく、より多くの疑問、質問を問いかけるのです。答えはまだ出てきません。分析していく過程で答えが見つかるはずで、重要なのは自分に課題を与えることです。どんな小さなことでも見逃さないようにするためにはとても必要な作業です。

論理から始めましょう、状況の理解をし、何がいつ起きているか、何があったのか。素朴な簡単な質問を恐れなくてください、答えはまだ見つからなくても心配しないでください。

この長編小説の登場人物たちが架空の人物ではなく、本当に存在したように感じてください。そのためには慌てて読む必要は全くありません。台本や作品を読むときに感情的に分析するのは良くありません。感情は私たちを惑わせます。

今回のワークショップで使用するのは、長編小説『カラマーゾフの兄弟』の1部です。戯曲は会話とト書きから成り立っていますが、散文では多くのヒントや作者からの提供があります。舞台上での立ち位置、雰囲気など教えています。なぜ作者がそう書いているのか考える部分がたくさんあります。

では、「カラマーゾフの兄弟 第11編 4章 賛歌と秘密」について進めていきましょう。まず、状況を整理しましょう。カラマーゾフ家の出来事です。カラマーゾフ家には3人の息子がいます。長男のドミートリー（ミーチャ）、次男のイワン、そして三男のアリョーシャです。イワンとアリョーシャの母親は一緒ですが、ドミートリーだけ母親が違います。父親はみな同じです。そしてもう一人兄弟がいます。それは下僕のスメルジャコフです。この長編小説は推理によって成り立っています。兄弟の誰が父親を殺したのか？ 長男のドミートリーに父親殺しの罪がきせられており、彼は留置所にいます。父親との間に遺産相続の問題があったからです。その上、ドミートリーの婚約者の父親は2人を引き離そうとしています。なぜならば、父親のカラマーゾフは女好きで、淫らな生活を送っているからです。

「賛歌と秘密」はミーチャの裁判の前の一日の出来事です。明日は裁判で、判決が出ます。登場人物たちはまだ誰が父親を殺したのか知りません。アリョーシャは父親殺しの犯人の情報を得るため、ありとあらゆる人々のところへ行ったりとミーチャのところへ向かいます。ミーチャのいる刑務所にも色々な人が訪れます。ここで一番重要なことですが、アリョーシャは、ミーチャのいる刑務所へ行くのが遅れてしまったということです。なぜならば、その前にホフラコワ家に行き、夫人と、リーザに引き止められてしまったからです。ミーチャのところには友人のラキーチンが訪れました。では今から読み始めましょう。

197 ページ7行目の「なぜこんなに遅くなった…」から読みましょう。ドストエフスキーはロシアだけではなく世界的に偉大な文豪であるということをお忘れなくください。素晴らしい心理学者でもあり、人間の心の奥の奥まで覗き込むことができます。人間の心の光を見つけるために、まず心の闇を見ます。いつも深い底に潜んでいる情熱を探します。私たち人間の奥の奥まで入り込むのです。精神的に深いところまで入り込みます。脅すためではなく、悩みや苦しみを通して光を見つけるためです。

ミーチャは情熱的な人間です。感情的で情熱的な人間です。素直な人間です。このようなタイプの人間は人を殺すことができると思われてしまう面があります。イワンは賢く、兄弟の中で唯一大学を出ています。雑誌などに記事も書いています。ミーチャが情熱の人であれば、イワンは知性の人である。イワンは哲学、思想としてとらえられます。アリョーシャは聖職者です。以前は修道院に居ましたが、家族のために家に戻ります。彼はみんなから愛されています。彼は人を助けるために、人を理解しようと努めています。

『カラマーゾフの兄弟』は未完成の小説です。ドストエフスキーは、アリョーシャについて続きを書こうと考案していました。このようなカラマーゾフ家の3人の兄弟は、恥知らずな淫らな父親の子供です。3人とも父親のことが好きではありませんでした。しかし、実際に父親を殺したのは4人目の異母兄弟であるスメルジャコフでした。最後の最後まで誰が殺したのか分かりません。ただ単なる推理小説作家でないのは、推理を通して人間の道徳的な問題が繰り広げられているからです。ドストエフスキーによると、人間が心の中で「この人に死んで欲しい」という気持ちを持つことが一番恐ろしいことだと言っています。この小説は実際の殺人犯を見つけることだけでなく、登場人物の道徳の探り、良心の呵責でもあります。

では読み始めましょう。エピソードごとに読みましょう、深入りせずに、状況を整理しましょう。いつどこで、なぜ、登場人物の気持ちは、どんな考えにたどり着いたか？ まず論理的に整理しましょう。原則を学びましょう。分析は2、3時間で終わるものではありません。すごく時間のかかるものです。

- ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** この部分では何が起きましたか？ いつ頃に起きていますか？ 夜遅い時間です、ミーチャの元にはラキーチンが訪ねてきて帰って行った。アリオージャは面会時間に遅れた。面会禁止の時間でしたが、頼んで入れてもらった。裁判前日の最後の面会です。翌朝には裁判です、もうあまり時間がありません。このことを理解しているとあまり時間がないということ、リズムは早いと思います。なぜアリオージャは今ここにきたのか？ 何しにきたのか？ ミーチャは本当にアリオージャが来るのを待っていたのか？ ミーチャにとってより大切な面会はラキーチンなのか、それともアリオージャなのか？ アリオージャは裁判前にミーチャが何を考えているのかすごく知りたいと思います。兄弟を慰めたい、支えたい。では、ミーチャは何のためにアリオージャが必要ですか？ アリオージャは朝からミーチャの刑務所に行くと話しています。ミーチャもアリオージャを待っていました。待ち詫びでいたのに、なぜラキーチンの話をするのでしょうか？

もう一度言いますが、まずは会話の論理を整理しましょう。まだ心の中の感情は分かりません。すぐにイメージ付けして演じてはいけません。まだ分からないはずです。感情で読んで結果付けるのではなく、論理的に読みましょう。論理の道をたどれば、必ず感情へたどり着きます。これは原則です。論理の輪の法則です。

なぜ2人とも立ったまま会話をしはじめたのでしょうか？ 面会室はとても狭い空間です。ドストエフスキーには好きなミザンセーヌがあります。至近距離で登場人物が話すのです。遅刻したアリオージャが、狭い空間でミーチャを公判前の最後の時を過ごすのです。もちろん舞台上では、様々な見せ方、配置がありますが、大切なのは人間の身体的な生活と、内面的な生活は密接に絡み合っているということです。この部分を演じるためには何が必要ですか？ 「兄弟の面会」だけでは不足です。「待ちかねた面会、遅すぎた2人」とした方が良いでしょう。

続きを読みましょう。

- ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** 今読んでいただいた場面は一つの劇（作品）として見せることができる部分です。分析しやすくするために幾つか小さな部分に分けましょう。これもスタニスラフスキーの提案です。大きな場面をこまかく分けるのです。小分けすることはとても必要です。今読んだ部分では何が起きましたか？ 1人は刑務所にいます、アリオージャは毎日ではないけれどもよく面会に来ています。事件は私たちを大きく変化させるきっかけになることです。1つ目の質問は「明日は公判ですね？」です。自分の兄弟が無罪になるか、有罪になって流刑にされるか心配しています。ではミーチャはどうでしょうか？「ああ、公判のことを言っているの？」ミーチャに何が起きているのでしょうか？ 公判が心配なのでしょうか？ そうではあ

りません。自分の運命は考えていません。心の中に起きた変化について考えています。刑務所にいる間に、考えが変わった、思考の変化があったことをアリョーシャに伝えたいと思っています。変化が起きたことは明らかです。

舞台上に2人の俳優しか存在しない時、2人が同じリズムで存在することはありません。アリョーシャはミーチャを救うために来ました。明日の公判のミーチャは何をしていますか？ 哲学、思想などとラキーチンのことを批判しはじめます。ここで1番重要なのは心の拠り所が2人とも全く違うとい

うことです。アリョーシャは、ミーチャが公判を恐れていると思っていた、しかし、ミーチャは公判のことではなく、新しい自分の考えを分かち合いたい、けれどもどう説明したらよいか分からない状態です。ミーチャは話したいことが沢山あるのに時間がない、うまく考えを伝えることができない状態です。以前も話しましたが、ミーチャは情熱的な人間です。彼は教養のない軍人です。まっすぐな、裏表のない、大胆な人間です。

## ◇◇ 休憩 ◇◇

**ジェノヴァチ** ドストエフスキーは情熱的な作家ですね。では、続けましょう。201ページの4行目からお願いします。

### ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** ここで何が分かりましたか？ ミーチャは昨日もラキーチンが来たと言っています。ミーチャの考えが大きく変わった理由はラキーチンではないでしょうか？ ラキーチンと議論を展開しながら、アリョーシャから自分の考えの指示を待っている。以前のミーチャはストレートで素朴な人間です。彼は行動の人間でした、思考タイプではありませんでした。ミーチャの思考をよく読むと、次から次へと移り変わっている。両親からの愛情もなく育ち、教養もない、口下手な人間です。ロシア語の言語で読むと軍人言葉を使い、複雑な哲学を農民が話しているような滑稽さがあります。「人間は神様がないなければなんでも許される」という思想。ロシアの宗教、神の存在を信じていた。私たちの地上の人生は、魂は死滅しない。神の教えに従っていたら天国に行け、地上で殺人、窃盗などしていたら地獄へ落ちるといった宗教的背景。宗教は抑制力をも持っていた、科学、化学の発展によって無神論主義が増えるのを嫌っていた。神の存在は、人間の悪の部分を抑える。ミーチャは神がいらないと言っていない、人々の信仰が薄れている。イワンの大思想は神はいないということ、なんでも許されるということ。父親を殺しても許される。イワンの中では父親殺しの犯人を許している。ミーチャは心の変化をアリョーシャに語るができない、会話がうまくできない、それにもうひとつまだ隠していることがあります。最後まで読むと分かります。

**参加者** イワンからスメルジャコフが「全ては許される」と言われたというのは、社会を通じてイワンの思想を代弁しているのでしょうか？

**ジェノヴァチ** 当時の無神論者に対してドストエフスキーが書いた小説『悪霊』があります。神が私たちに制しています。無神論者は、全てが許される思想なので、人間の傲慢さを育ててしまいます。ファシスト・イデオロギーです。相手を尊敬することができないのであれば、私たちは敵同士にな

ってしまいます。だからこの小説の題名も「兄弟」なのです。スメルジャコフも兄弟です、知識のない、弱い人間です。だからイワンの思想を受け入れるのです。しかし同時に、自殺することを恐れませんが、公判に行くのを恐れたわけではありません。ラキーチンとイワンの思想を受け入れますが、最終的には失望します。けれどもミーチャはイワンの思想と戦っています。動物的な本能、情熱が彼らの思想を受け付けられないのです。

では続きを読みましょう。

#### ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** 今読んでいただいた箇所は前の部分の続きです。ミーチャはラキーチンの運命を語っています。ドストエフスキーは様々なジャンルを扱っています。哲学的な思想に頭を使いましたね。でも今は小話のような会話です。難しい話が続いた後の一休みです。気持ちの切り替えが素晴らしいです。なぜかというところからさらに複雑な話をしようとしているからです。イワンとラキーチンは「なんでも許される」という思考を持っています。そのため滑稽な話をここでします。20代のラキーチンは40代の女性と結婚しようとしています。愛情があるからではありません、彼女のお金が目的です。しかしそれが失敗になったとき、彼女を侮辱します。新聞に記事を書いて復讐します。なぜかというと、ラキーチンは自分の方が上だと思っている、傲慢なのです。選ばれた人だと思っているからです。今、半分ほど読みましたが、ミーチャは一番重要なことをまだ語っていません。どのような変化が起きているのか？ なぜ先延ばししているのでしょうか？ おそらくミーチャはいろいろ考えて非常に大切に大事なものを抱えています。アリョーシャも大切な人です。アリョーシャはミーチャの話を受け入れたいと思っています。一番大切なことを言うために心の準備をしているのです。今、ミーチャとアリョーシャの心が近づいています。魂が近寄ってきています。もし、この部分をエチュードとするならば、ラキーチンの話をするのは重要ではなくて、魂の歩み寄りが大切なのです。どうしてもいいような話をするときは時間を稼いでいるということです。理解することが大切です。今、分析するために言葉で聞いていますが、舞台上では聞くだけでなく、視覚も入ってきます。今から一番中心部に近づきましょう。読み手を交代して続けましょう。

#### ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** ここは事実上のクライマックスです。アリョーシャが来たときにミーチャの変化を話しはじめ、そして話がそれて、また戻っています。アリョーシャは恐ろしい日だね？ 助けたいと思ってきた。けれどもミーチャはアリョーシャを兄弟愛から抱いてキスして長いモノローグを語ります。

ミーチャは恐れていない。なぜでしょうか？

**参加者** ミーチャは無実ですが、罪を受け入れようとしているからです。



**ジェノヴァチ** その通りです。ミーチャは自分の命は惜しくありません。明日の公判で有罪になっても受け入れられるのです。人々がなんと言おうが気にもならないのです。自分は父親を殺していないという事実は変わらないのですから。ある意味、裁きを受けることは良いことだと。世の中にミーチャは存在している、裁きについては神が決めることだ。全てを受け入れれば良いのだと。鉱山で働くのは怖くない、公判で自己弁護したくない。人生の中で今の苦しみは最高の苦しみではない。苦しみに中にも幸せはある。ラキーチンの思想は神がいなければ自分が神だ。ミーチャの思想は神の意思だ、全て受け入れる。善として受け入れる。鉱山の中でも働くことはできる、幸せも見つけることはできる。

先ほども話しましたが、ドストエフスキーは闇の中から光を見つけるのです。ドストエフスキーはクライマックス（結果）は最後にならないと分からないように書いています。もし、アリョーシャがミーチャを理解していればこのような会話はなかったでしょう。聖職者のアリョーシャよりもミーチャの方が神に近い存在なのです。ドストエフスキーはミーチャを通して私たちに処方箋を渡しているのです。試練を受け入れることです。ミーチャは聖職者でもないし、教会にも行っていません。アリョーシャの驚きは大きいです。逆説的なことが起こります、聖職者であり、思想があるはずなのに、ミーチャの方が神についてよく理解しているということです。

エチュードでは言葉に隠されている意味を見つけること。言葉の数は気にしないでください、省略することもできます。では続きを読みましょう。

#### ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** ここからはテーマが変わります。女性についてです。ミーチャは前にいろいろ変化が起きたと話しました。今はイワンに話を移しています。ここはさらに深く入って話し始めます。ある意味、最終的に彼が何かを話したいことがあると気づく、しかし気づかないふりもしなければならぬ。イワンはグルーシェニカと逃げるようにミーチャに勧めている。なぜミーチャはこんなに長く話すのか？ 最終的に話さなければならぬことを話すのを恐れているからです。

この編は「兄イワン」という題名です。ラキーチンはよく来て話をするが、イワンは黙っている。イワンは父親のことを正しかったと言っている。ミーチャはイワンについて話をしていない、公判が終わったら話しますと。興味深い結末は最後まで分からないのです。ある行動を示しています。グルーシェニカのことを考えると苦しいと告白します。自分のことを考えているのではなく、愛する女性について話します。父親殺しの罪をきせられているミーチャの心の中は澄んでいます。しかし、シーンの核心には触れていません。なぜミーチャはイワンのことを言わないのか？ ミーチャ自身はグルーシェニカと逃げたいと思っているのでしょうか？ お互いに愛し合い、苦しんでいるということが分かります。葛藤はとても興味深いです。どうい対立、葛藤が起きているのか？ 罪を受け入れられる幸せ、グルーシェニカのことは葛藤です。ラキーチン、イワンは自分のことしか考えていません、けれどもミーチャは他に人のことを考えることができます。謎を解く時期が近づいています。

休憩を挟みましょう。

#### ◇◇ 休 憩 ◇◇

**ジェノヴァチ** では続けましょう。最後に近づいていますが、グルーシェニカの名前が出てきました。ドストエフスキーの作風の素晴らしさです。核心に近づくまで内に潜めているのです。

アリョーシャのセリフは少ないですが、彼の短いセリフによりミーチャのセリフに変化があります。このシーンでは、ミーチャではなくアリョーシャが主導権を持っているのです。消極的に聞いているわけではありません。

次に読んで頂く部分はドストエフスキーの思慮深さと、滑稽さが入り混じっています。では、配役を変えて読んでみましょう。215 ページの後ろから3行目です。

#### ・参加者、読む

**ジェノヴァチ** ミーチャの心の中の変化が起きて、アリョーシャはそれを理解しようと努めています。ミーチャはグルーシェニカのためにその変化を自

分自身で認めることを恐れています。グルーシェニカとの秘密をまだ打ち明けられずにいます。男女の恋愛関係の懸命なところが現れています。人にはそれぞれ得意分野があります。ミーチャの得意な分野は女性に関することです。彼は女性を素直に好きになることができます。ドストエフスキーの作品を見てみると、主人公で一途に一人の女性を愛する男性はあまり出てきません。ドストエフスキーによると愛はエゴイストなものではない。愛とは人間の関係を越えたものです。ミーチャはアリョーシャに女性に対する男性の知恵を教えようとしています。ミーチャはグルーシェニカを愛しています。私たちは女性の尻にひかれなければならない、けれどもそれを見せたり、感じさせたりしてはいけません。グルーシェニカは感情的な女性なので、やきもちやきです。文中のミーチャのセリフで「以前はあの悪魔的な曲線美が俺を悩ませただけだったけど、今や俺は彼女の魂をそっくり自分の魂を受け入れて、彼女を通して自分まで真人間になったんだからな！俺たちは結婚させてもらえるだろうか？」とあります。最初は彼女の肉体に惹かれた、けれども今は魂を通しての愛情に変わっています。愛する女性が側にいればどんな辛いことでも耐えられるのです。アリョーシャはグルーシェニカの言葉を

ミーチャに伝え、ミーチャは満足します。グルーシェニカがミーチャのことで悩んだり、苦しんだりしているのを聞いて嬉しく思います。

ドストエフスキーの作品では、愛し合う2人はいつも苦しめ合っています、けれども側にいなければもっと苦しみます。

ここで重要なのは、ミーチャはただ愛しているだけではなく、グルーシェニカがいなければ生きていくことができないのです。ここでミーチャは、イワンからグルーシェニカとアメリカへ逃げるように勧めます。ドストエフスキーの作品で「アメリカ」とは特別な理解で、地理的な場所ではありません。登場人物たちの住んでいる場所と比べると、叶えることができない夢のような場所です。では続きを読みましょう。ドストエフスキーの文章の中のミザンセーンについて話したいと思います。今いる場所は刑務所の面会室の中です。誰も盗み聞きしていないのに、誰かが聞いているような気がして心配します。精神的な恐れを表しています。ミハイル・チェーホフが「心理的なジェスチャー」と名付けています。ミーチャはアリョーシャの耳元で囁きはじめます。舞台上で全くこの通りにする必要はありません、作者の意図を掴み、本質を変えずに自分なりの舞台配置、立ち位置等を考えるもの重要です。

#### ・参加者、読む

**ジェノヴァチ** 続きは秘密の告白です。キーワードはミーチャがアリョーシャに言ったことです。「実はね、これは良心の問題なんだよ、最高の良心の問題なんだ。あまり重要な秘密なので、俺は自分一人で解決できずに、お前に話すまで一寸延ばしに延ばしてきたほどだよ。それでもやはり、今決定するのはまだ早い。」ミーチャは自分一人で答えを出すことができません、アリョーシャにも全て話すことができないのです。もし無罪であれば脱走する必要はない、自分から逃げることはできない脱走したくない。有罪になって、流刑されても鉱山で働くのも怖くない。しかし愛する人の側にいたい。自分の中にある道徳の法則に従って生きています。ミーチャにとってアメリカに脱出するのは彼の意に反しています。しかしそれと同時にグルーシェニカを失うことを恐れています。彼の心の中の対立であり、葛藤です。自分の心に従うべきか、意に反するべきか？ 心を引き裂くように悩んでいます。有罪、無罪の判決は彼にとって重要ではありません。ミーチャはモノログの最後に「決めないでくれ、俺に手加減してくれよ、俺はグルーシェニカなしには生きていけないんだ、裁判を待っていてくれ！」と言います。判決を待っているわけではなく、自分はどうするか決めるのを待っているのです。

また、ここでもドストエフスキーの技法があります。このときのミーチャとアリョーシャです。舞台上でいかに見せるか、なぜすぐに告白できなかった

のか、告白した今はどういう状態なのか？ ミーチャはグルーシェニカと結婚できないということを恐れています。犯罪者と結婚することによって、グルーシェニカも犯罪者の妻としてのレッテルを貼られてしまいます。しかし、ミーチャは父親を殺していません。続けましょう。

#### ・ 参加者、読む

**ジェノヴァチ** 補足ですが、イワンはカテリーナ・イワーノヴナのことを愛しています。しかし彼女はミーチャのことが好きです。ですからイワンはミーチャがグルーシェニカとアメリカに逃げることを強く勧めるのです。

ここで何が起きましたか？ どんな結果になりましたか？ ミーチャはアリョーシャが来るのを待っていました。アリョーシャのアドバイスを聞いたかっただけと同時に、聞くのが怖かった。最終的にどうなりましたか？ 結果として解決しませんでした、さらに複雑になりました。人生知れば知るほど分からなくなります。アリョーシャはミーチャの心の中の底なしのやり場のない悲しみを見てしまいました。アリョーシャはミーチャにどんな言葉をかけてもアドバイスできない、彼自身がその答えを出さなければならない。ミーチャの心は無罪であってもグルーシェニカと流刑地に行こうと思っています。イワンはミーチャが父親を殺したと思っています。だからこそ、最後にミーチャはアリョーシャに父親を殺したと思っているかと聞きます。

アリョーシャの心の中にも障害がありますが、ミーチャが殺していないと言います。ここまで来てもまだ殺人犯は分かりません。推理小説的な要素と、心理的、哲学的な要素が入り混じっています。ミーチャは言葉では流刑地に行くのは怖くないと言っていますが、人間はそんなに強くありません。

アリョーシャの支えが必要だったのです。イワンが自分のライバルをアメリカに送りたい、殺人を犯した兄を救うという考えが交差しています。そのことをミーチャからの話でアリョーシャは感じます。

ある意味このシーンは明確ですが、水面下には様々なことが潜んでいます。今は文学的な解釈です。例えて言うと新しい川を作っています。道を開拓していて、最終的に水を流すのです。何が起きて、どのようになったのか？ 狭い空間の中で2人の登場人物しかいません。狭い空間はミーチャをイメージしています。2人の会話は囁くような声で話をしています。隔離された空間での会話です。時間があまりない、リズムもあります。時間を伸ばさないでください、圧縮された時間の中での世界です。ドストエフスキーのリズムは今、現時点です。スピード感がなければなりません。

何か質問はありますか？

**参加者** 結果として複雑になったと言いましたが、登場人物それぞれが複雑になったのか、話が複雑になったのでしょうか？

**ジェノヴァチ** これは登場人物の状況が複雑になりました。私たちは未来を持って生きています。ミーチャは父親を殺していません、公判の判決には恐れていません。有罪になっても受け入れる覚悟です。でももし、グルーシェニカがそばにいないければ死んでしまいます。アリョーシャと話をすることによって答えを見いだせるかもしれないと思いましたが、判決が出るまで答えは出せません。脱走という誘惑がある。でもそうしたくない。ミーチャはイワンを信用していないし、アメリカに行っても自分の心は救われない。ミーチャは「イワンを愛してやってくれ！」と言います。ミーチャの内面はア

リョーシャ、イワンよりも高い位置にいます。

チェーホフの作品は日常的な場面が多いですが、ドストエフスキーの作品は対象的で非日常的で悲劇的、殺人などが起こり、緊迫感が高いです。際で解決法を見つけるような作品が多いです。

**参加者** 信仰心と女性に対する愛の葛藤だと思います。私は女性に対する愛の方が強いと思うのですが、それは私が日本人で信仰心が薄いからなのでしょうか？ ロシア人の直感はどうなのでしょう？

**ジェノヴァチ** ロシア人も色々な人がいます。登場人物はロシア人です。作家にはそれぞれ自分の視点があります。日本にも安部公房という作家がいますよね。女性への愛の方が強いとは言い切れないと思います。

**参加者** 演出家の仕事はどこにテーマを見出すかでしょうか？ 私は『カラマーゾフの兄弟』を読んでいません。今日読んだ部分しか知りません。ミーチャは答えを持っていると思います。彼女と逃げたいという欲望です。ミーチャは克服しようともがいているともいます。

**ジェノヴァチ** 興味深いですが、全て作品を読んで確認してください。思い浮かんだアイデアがかみ合えば良いですが、そうではないかもしれません。まず小説を読んでください。裁判中の様子も知らなければなりません。ミーチャは有罪になり、グルーシェニカも彼について流刑地へ行きます。

この部分だけで決めてしまわないでください。しかし、失敗を恐れずにアイデアを出してください。作品を全部読んで確認をしなければなりません。頑固に頑なに自分の間違っただけの意見を通さないでください。平凡な考えしか浮かばないのは面白くありません。

明日はエチュードを見せていただきたいと思います。好きな部分を選んで見せてください。みなさんには今晚と、明日の午前中と、時間があります。頭で分析したものをこの空間を使ってエチュードをしてください。恐れずに理解しようと試してみてください、最初から成功させようとしなくてください。どこのシーンでもかまいません。作者が登場しても、ミーチャとアリョーシャ以外にイワンやグルーシェニカが出てきてもいいですし、必要ないかもしれません。舞台でも客席でも、廊下でもどこの場所でも構いません。うまくいかなかったら笑って忘れてください。2、3分の短いエチュードでも大丈夫です。どこのシーンが印象に残っているか、自由な発想で試みてください。音楽を使いたい方は使ってください。目的はエチュードのメソードのやり方を知ることです。「行動分析のメソード」です。行動を探りながらテキストを分析するのです。登場人物の性格のヒントも見つけられるでしょう。ミーチャの歩き方、眼差し。男性的、乱暴者のような歩き方。それとは対照的な修道院にいたアリョーシャはどうでしょうか？ アリョーシャと、ミーチャはお互いにどのように作用されているか？

明日はエチュードから始めましょう。何を発見したか、確認していきましょう。演劇人の仕事は表現することです。兄弟のことを理解したというのをどのように表現しますか？ もちろん短期間で理解するのは不可能です。ドストエフスキーによると兄弟4人とも父親殺しです。葛藤に満ちた、葛藤の多い作家です。カラマーゾフの父親は本当に嫌な人間として描いています。「行動分析のメソード」に触れることが今回のワークショップの目的です。複雑で難しい教材であればあるほど注意深く覚える気持ちが出ると思います。恐れないことが一番です。エチュードは一人でやってもかまいません。

他に質問はありますか？

**参加者** 登場人物が全て男性なのですが、女性が男性役を演じるときの注意はありますか？

**ジェノヴァチ** 重要なのは男性になりきることをしないでください。スタニスラフスキーの魔法の if で「もし私が～だったら」です。私の卒業生でシ

ラー『群盗』を演出したとき、男性の役を女性がやりました。デリケートでソフトな部分が現れました。もう一度言いますが「行動分析のメソード」に触れることが今回のワークショップの目的です。では、また明日。

◆ ◆ 二日目終了 ◆ ◆  
◆

**ワークショップ 三日目 7月13日(日)**

**参加者** 役の行動を見つけるのが困難です。どの時点で見つけるのでしょうか？ エチュードをするときはいつ見つければ良いのでしょうか？

**ジェノヴァチ** 行動を見つけるのはとても難しいです。稽古期間中ずっと行動を探す模索期間です。段階があり、何が起きているか、状況を把握する、理解した状況を選別する、一番重要なもの、そうでないものに分けるという段階があります。必要なものを残す。行動の論理性が見つけられません。

登場人物の感情、内面の分析。身体的、言葉の行動。言葉のリズムも見つけていきます。役が出来上がったときは行動が見つけられたときです。稽古の間は行動を探る期間です。ミーチャ、アリョーシャ、イワンの生きる本質をつかめれば行動をつかめたことになるでしょう。

**参加者** 分析が一番重要ということですか？

**ジェノヴァチ** そうです、行動を分析することです。ですから「行動分析のメソッド」が有効なのです。まずは頭脳で分析します。しかし頭脳での分析は文学的なので、身体を用いて確認する必要があります。身体で分析するのです。

『カラマーゾフの兄弟』で「少年たち」という章があり、その部分を演劇大学で卒業公演として上演したときの話です。犬が出てきます。舞台上でこの犬をどうしたら良いでしょうか？ 最初は本物の犬で試してみました。言うことを聞いてくれませんでした。今度は犬のぬいぐるみを用意しました。またうまくいきませんでした。最終的にある学生が犬を演じることになりました。何度もエチュードを通して試してみました。二本足で立ったり、登場人物の一人の少年に対して同情したり、うなり声を出したり、興味深い試みでした。この公演では犬が観客の一番好きな登場人物になりました。あまりにも自然に演じることができたので、誰も人間が犬の役を演じているということに違和感を感じませんでした。私たちもエチュードを通してこのような効果にたどり着いたのです。エチュードは演劇作品に雰囲気、人生や空気を与えてくれます。未来の演劇とは即興、エチュードに基づいたものであると思います。ビジュアルや、視覚に趣向を凝らした演劇よりも、生き生きと俳優たちが舞台上に登場人物として存在する舞台の方が実感できると思います。

エチュードに対して初心者ではなく、何年も続けている俳優は毎朝歯磨きをするように身につけてきます。単純に台本を読んでセリフを覚えるよりも、エチュードを繰り返すことによって素晴らしい作品を作り上げることができると思います。

**参加者** ロシアでは演劇に携わっている人たちの社会的地位はどのようなものなのでしょうか？ 日本では演劇人たちの地位はあまり高くないと思うので…どんな方たちが演劇を見に来るのでしょうか？

**ジェノヴァチ** ロシア演劇は特にスタニスラフスキー以後、ソビエト時代は高い地位にありました。演劇大学を卒業した演劇人たちは不自由なく暮らすことができました。またモスクワの劇場で仕事することができれば、数年後には住居が与えられました。勤続年数、知名度によって人民俳優、功労俳優、功労芸術家などの称号が与えられ、死後も有名な墓地に埋葬されました。しかしソビエトが崩壊した後、演劇の地位に変化がありました。現在の社会には劇場は必要ないという時代になってきています。国家予算が削られています。以前とのギャップが大きすぎます。

今、私たち芸術家はみなで集まって話し合いをすることもあります。モスクワ市内に200余りの劇場があります。閉鎖されることを恐れています。以前は思想の一つとして劇場がありましたが、今は娯楽の一つとして劇場が存在しています。しかし、才能ある素晴らしい演出家、俳優はたくさんいま



す。そして世界中でドラマ演劇を支えているのはロシアと、ドイツだけです。ドイツは演劇の組織をうまく構成したからです。これは私自身の考えですが。

観客についてですが、モスクワは大都会で劇場も多いです。生粋のモスクワ人は少ないです。地方から多くの人が集まっています。観客はいます。ある劇場では切符を購入するのも困難です。様々な劇場があり、観劇しています。私たちの劇場には特別なスターはいませんが、劇場は常に満員です。また、モスクワ芸術座には有名なスターがたくさんいます。そのためスター目当ての人、演出家目当ての人などに分かれています。好きな演出家の作品のみを見る観客、好きな俳優のみを見る観客など様々です。国立マールイ劇場には180人の俳優が所属しています。ここの劇場の演出もしました。

しかしここの劇場の俳優たちすべてが舞台に出演しているわけではありません。

モスクワの劇場は観客に不自由はしていませんし、様々な演劇があります。

**参加者** モスクワには演劇を志す若者はたくさんいるのでしょうか？

**ジェノヴァチ** 俳優になりたい若者が多すぎます。演出家を希望する若者は俳優ほどではありません。以前、演出学部は大学卒業後にしか入学することができませんでした。しかし、現在は2度目の大学入学は授業料が非常に高く勉強することが難しい状態です。モスクワは物価が非常に高い都市です。教養を身につけた演出希望の若者は入学するのが困難です。このような状況から10代の若い女性が入学を希望しています。しかし彼女たちの中にはスタニスラフスキーも知らない人もいます。若い男性は芸術よりも、経済学の方に流れていきます。女性の方がたくましいのかも知れません。

**参加者** グループを仮に作ったとして、日々訓練する題材として取り組みやすい戯曲、作品はありますか？

**ジェノヴァチ** 演劇の教育者とやるべきです。ロシアの学生は1年生の間はエチュードをします。今日はドストエフスキーの作品のものをしましたが、1年生のときには日常的なものです。猿を観察してエチュードにします。猿の先生、スパイの雄鶏など観察をもとに、空想、想像力を膨らませていきます。テキストを使うのは2年生時になります。音楽に乗せてエチュードをしたり、美術作品からエチュードを作ったりします。最初からテキストを使うことは危険が潜んでいます備のできていない俳優はテキストを暗記してテキストを頼りに、行動を考えることなくセリフを発してしまうからです。

生きている俳優が舞台に存在するためには、まずは自分を磨いてください。

.....

記録 丸知亜矢

# ロシア特集Ⅰ【東京】

ワークショップ 一日目 7月15日(金)

講師、スタッフ、参加者、通訳の紹介、そして演出家スタニスラフスキーの工場経営者としての側面の話の後（彼は有能な演出家としてだけではなく、極めて優れた経営者でもあった）、レッスンが始まった。

## 【今回の取り組みについての説明】

**ジェノヴァチ** 普通ロシアの演出家が来日にした時にはチェーホフ作品を取り上げることが多いと思うが、ドストエフスキーという作家の作品は日本とも何か深い共通点があると感じ、この作品に取り組むことにしました。

彼の作品が映画化された中で最高峰のものの一つが、黒澤明のものである。ロシアでドストエフスキーの作品が創作される際にも、この映画が思い出され、彼の作品を読み解く一つの模範として参考にされている程である。

私自身も白痴を創作し、上演した経験もあります。それは20歳の時で、11時間の芝居を3日間に分けて上演した。私にとって最も愛する作家がドストエフスキーです。『カラマーゾフの兄弟』も含めて幾つかの彼の作品を作ったことがあります。去年の名古屋のワークショップではカラマーゾフの兄弟を取り組みました。今回は『白痴』の第2編の3部と4部に取り組みたいと思います。

何か質問があったら、恥ずかしがることなく、いつでも質問してください。一番大切なことは理解するという事です。スタニスラフスキーは理解するという事は「感じる」ということだと言った。

そして、理論的なことから始めてしまうと、むしろぬかるみにはまってしまう恐れもあるので、今回は先ずシーンに取り組み、読み込んでいく中で理論について話していくことにしようと思います。

そして4、5日目にすでにエチュードにも取り組んだ後に理論についてお伝えしていこうと思います。

## 【小説の舞台化とスタニスラフスキー・システムについて】

**ジェノヴァチ** これは戯曲でなく長編小説なので、描かれた情報が多く人物の外見や心の中の感情や、行動の動機なども作者から与えられている。それは戯曲よりもより多く、より自由な想像や新しい舞台の創造性の可能性を得ることができる。

加えて、ドストエフスキーの散文には特に深く哲学的な内面心理も存在していて、それに取り組む魅力は高いものであると思う。散文作品に取り組む一つの手法として、スタニスラフスキーの発見した「事件を通して人物の行動を分析・解釈し、そしてエチュードと即興を通して理解していく」という手法を用いようと思う。

スタニスラフスキーのシステムはロシアだけに限らず、ピーター・ブルック、ジャン＝ルイ・バロー、グロトフスキー、アルト一等々世界の偉大な演出家たちによってヨーロッパ、世界中の演劇の歴史が、それを豊かにしてきています。

彼のシステムは人工的に作ったものではなく、俳優が持っている本質をただ発見して言葉にただけである。そしてその後、他の人が、それを補充し

たりすることで、より豊かにしてきたのです。これは様々な演劇の美的な観点とはぶつかり合うものではないです。

これからも皆さんと一緒に場面を解釈していくが、その表現はそれぞれの美意識により様々なものとなるだろうし、それが望ましい。風俗劇、不条理劇、シュールレアリズム演劇、ブレイト劇など、いずれであろうと「舞台にいる者が自分で思考し、行動する生きた存在である」という大原則は常に守られるべきだからです。

常に求められることは「与えられた状況の中での目的に向かった自分自身の本当の情熱を持った行動」である。それも観客に見られているという状況においてである。

## 【『白痴』について】

**ジェノヴァチ** この作品の基本的な葛藤の焦点を理解するためにも少しお話ししましょう。ムイシュキンが治療を終えて、ペテルブルクに戻ってきます。彼はほぼ5年間ロシアを離れていました。心の病気の治療だった。彼の生活を支えていた人物はその間に亡くなり、その後2年間は彼の治療をしていた医師が支えていた。そしてムイシュキンは遺産を受け取れそうだという手紙をもらい、ロシアに戻ってくるようになった。彼は心の病気を持った人だったのに、いきなり沢山の情熱と矛盾を持った巨大な都市に行った。彼には一つの目的があり、それはロシアの人々を理解したい、愛したいというものだった。彼は自分の病気は完全に治ったと思っていた。

ドストエフスキーが白痴のムイシュキンを考えた時、本当に善良な肯定的な人物として描きたかった。そのモデルはイエス・キリストだった。複雑な矛盾を抱えた人たちと出逢う中で、2人の女性と出会い、2人の女性を愛してしまう。彼は出会う全ての人を理解し、許し、愛したいと願っていたが、やがてそれは不可能なことであるということに打ち当たるのです。

全編を通して3回の発作を起こし、最後の発作の後に彼は正気を失い、もう二度と回復しない狂気の状態になってしまう。つまり、とても幸せな思いでペテルブルクに戻ってきて、人々を愛そうとするが、発作の度により病が深くなっていき、最後には全く無力な病人になってしまう。人々は彼のこと嘲笑をもって「白痴」と呼んだ。彼は「調和」を求めたが、「破壊」に行き着いてしまった。

ドストエフスキーは、この物語を通して非常に痛ましい悲痛な問題や考えを引き出しています。「人は他人を理解することは可能なのだろうか？」

「人間は本当に別の人間を抱えている嫉妬心や羨望心、悪意、エゴイズムを克服して愛することができるのだろうか？」答えはないが、疑問・問題が提示されている。白痴とは非常に善良な人間の破滅について描いた物語である。

これから、みなさんと一緒にムイシュキンの破滅に向かう道のりについて読み解いていきましょう。

はじめに25歳の彼は幸せな気持ちで電車に乗りペテルブルクに向かってくる。そこでロゴージン(27歳くらい)という男と出会う。この2人の人物に特にみなさんの注意を向けたいと思います。

ロゴージンはムイシュキンとは全く正反対の人物である。ムイシュキンが非常に繊細な心を持った存在だとすれば、ロゴージンは商人の家系の出で、全く教養はなく、情熱的で、彼は自分の真実を持っている極端な人間です。ものすごく幅の広い、一旦、人を愛するとなると魂の底の底まで愛してしまい、一旦、憎むとなると敵となって殺してしまう。

愛から憎しみまでの距離は1歩しかない。このような相矛盾する正反対な人間が同じ場所に引きあわされる。両方とも遺産を受け取る。そして同じ1人の女性を愛する。

ナスターシャである。ドストエフスキーが描いた驚くべき人間像である。彼女の名は「子羊」という意味がある。古代には捧げものとして存在していた。ムイシュキンとは「小ネズミ」という意味、ロゴージンとは「獣の皮で作られたゴザ（殺された獣の皮から作られた）」という粗野な動物的な存在の意味がある。それに対してナスターシャは「子羊」なのである。まさに犠牲者になるのである。

ムイシュキンとロゴージンの最初の出会いの場面はよく読んでおいてください。

## 【 ナスターシャの今までの運命について 】

**ジェノヴァチ** 小さい時に両親が亡くなり、妹とともに孤児になり、トーツキーという金持ちの養女になった。妹はほどなく亡くなったが、ナスターシャは生き延びた。トーツキーは都会で、彼女は田舎で暮らした。そして小さな女の子だったのがやがて娘になった頃、トーツキーは彼女に目をつけた。彼はとても好色な男であった。

ナスターシャにいろんな世話をした。歳の差は父と娘くらいあった。家庭教師を雇って教育し、自分のための玩具を育て上げた。トーツキーは彼女の無垢さを利用して自分の遊び相手に仕立て上げた、それをナスターシャは生涯決して忘れなかった。

トーツキーは、ナスターシャの経済力がなく、完全に自分の支配下にあるという状況を利用した。

しかし、彼女は淫らな女性にはならなかった。5年間自分に男を近づけなかった。怒りと腹立ちは内面に残ったまま、自分は不幸せで、良くない女だと信じ切ってきた。彼女は美しい女性だった。そして美しく、教養のある女性はトーツキーにとって危険な存在になってきた。そのエキセントリックな振る舞いも。

その性格を知るには彼女がお金を燃やしてしまう場面を読み直してもらえたら良く理解出来るでしょう。

そんな女性を愛したロゴージンとムイシュキンだが、2人の愛し方は全く違うものだった。ロゴージンの愛し方は情熱、女性を自分のものにし、権力下に置きたいという欲情であり、ムイシュキンのそれはその女性への哀れみ、憐憫、同情である。

ムイシュキンはロゴージンがするように自分は女性を愛せないと言う。つまり女性と寝ることは出来ないと。ムイシュキンはもう1人の非常に美しく情熱的なアグラヤーという女性を愛してしまい、ムイシュキン、アグラヤー、ナスターシャ、ロゴージンという四角関係が出来てしまう。

結婚すると思えば、当日に逃げ出してしまうことを繰り返すが、最終的にはロゴージンはナスターシャを殺してしまい、その死骸のそばに気が狂ったロゴージンとムイシュキンがいる。そしてロゴージンはやがて正気を取り戻すが、ムイシュキンは生涯二度と正気を取り戻すことはなかった。

どれほど激しい熱情と極端な感情が噴出しているかを理解してほしい。

ドストエフスキーは与えられた状況をとて濃密にして、人物たちを自分自身も他人も様々苦しませ、悩ませる。そして次に彼らは真実を探し求める「何を信じたら良いのか？どのように生きたら良いのか？」と。ものすごく極端なお互いの関係の中で。

ドストエフスキーの世界は荒々しいほどに激しい情熱の世界である。

私が初めてこの作品を読んだのは11歳の時で、良く理解できないままに、その激しい行為の連続の野蛮な程の面白さに惹きつけられました。そして大人になり、秘められた人間の本性についての悲しい考え、救いようのない行き詰まった考えに行き着いた。しかし、初めて読んだ時のあの原始的な喜びも同時に残っています。そして、彼の作品にはユーモアがあります。それが彼を平凡な退屈な作家にしない重要な要素です。舞台化した時には必ず笑いが噴出する瞬間があるのです。

ドストエフスキーの作品は一見すると非常にリアリスティックな印象を受けますが、現実世界ではあり得ない程の極端な情熱や状況の世界を持っていることから「空想的リアリズム」と名付けられています。とても写実的だが、同時に非現実的であるという世界です。

非常に長い前置きをしましたが、皆さんをこの長編の世界に引き込みたかったからなのです。ここで一旦休憩にして、休憩後は実際に取り組む場面に入ってきましょう。

◇◇ 休憩 ◇◇

## 【 休憩後の進行 】

幾つかのパートに分け、読み手を交換していきながらゆっくりと読み、その後に場面のことについて全員で徐々に分析を進めていきました。

**ジェノヴァチ** では、まず、ゆっくりと読んでいききましょう。焦らずに「人を知るのと同じように」性急に役を判断しようとせずに注意深く、スタニスラフスキーが呼んだ所謂「理性による分析」を進めていきましょう。

テキストの分析において大切なことは、何が起きているのか？ どこで？ いつ？ なぜそれが起きているのか？ つまり「事件」と「作者によって与えられた状況」を先ず捉えることです。そこから徐々に、人物の行動の論理を捉えていきましょう。

## 「 Start～ロゴージンの最初の台詞までの場面について 」

### ・先ずはここで何が起こったのか？

3ヶ月ぶりに再会

ロゴージンにとっては全く予期しなかったムイシュキンの来訪

### ・この場面に名前を付けるとしたらどんな名前をつけられるだろうか？

「ロゴージンとムイシュキンの思いがけない出逢い」

ロゴージンにとっては全く予期せぬ出逢いであった。

### ・空間についての情報も整理してみる。

空間のあり方はその物語、人物の性格や内面を表現する一つである。

ロゴージンの自宅の血の色をしている内面の壁（血に染まっている）、それが彼にとっては居心地が良い住まいだということを理解する。

※ ロゴージンもこの家や家具の一部であり、それが彼の巣穴である。しかしそれは決してそのまま舞台美術に反映させる必要があるということを行っているのではなく、それを知ることが状況や人物の行動を理解する為に役に立つということ。

全く単純に見える外面と裏腹に、内側は秘密めいていて迷宮のような存在。

例えばノルウェーでは自宅に客を招かない。それは自分の砦と同じだから。それを知っていることは、ストリンドベリやイプセンの作品をより正確に

理解することを助けるだろう。

### 「ロゴージンの最初の台詞～度を失っている様子だったまでの場面について」

**ジェノヴァチ** 役の行動を探るとき、文学的に分析をしないように気をつけることが重要です。文学的に分析する人は役を哲学的に感情的に捉えていこうとします。俳優は相手役つまりパートナーとの相互に依存した行動は何なのか？を考えるようにする。

いずれは自分がその人物を演じるためにそれを考え、読む。つまり、相手にどんな影響を与えたいのか？ どう変えたいのか？ 何を求めているのか？（＝どんな行動をしているのか？）をパートナーとの関係の中で読み解こうとしましょう。文学的な分析は、ドストエフスキー愛好家、ドストエフスキー研究会の方たちに任せておきましょう、彼らの仕事なので。

私たちが考えなければならないことは、例えば、ロゴージンとムイシュキンが思いがけず出会い、そこからムイシュキンが帰ろうとし、それをロゴージンが引き止めて中に入れるまでの間に、どんな相互行動が行われたのかを探ることです。

その次は、家の中に入ってから、お互いにどんな行動が交わされたのかです。そこにはどんな目的が互いにあったのか？ そしてその目的の達成を阻害している障害は何であるのかを突き止めることです。

それを考え、仮説を立て、即興で試し、また振り返り、何がうまくいき、何がうまくいかなかったのかを検証し、再度仮説を立て、即興する。この繰り返し「行動による分析」で、これこそが最もオーガニックな舞台を生み出す方法です。

それでは、明日はこの先を進めていきましょう。

◆ ◆ 一日目終了 ◆ ◆

## 2日目 7月16日（木）

### 【 前日のワークショップへの質疑応答 】

参加者 「スタニスラフスキー・システムは才能のある人にとって必要で、天才には必要ない」という意味について詳しくお聞きしたい。

**ジェノヴァチ** まず、天才の人は学ばなくても演じられるので、必要ないということです。天才ではないが才能を持った人をシステムによって一層伸ばすことが出来るということです。ですが、システムは才能を与えることはできません。だから才能そのものがない人には残酷な言い方ですが、どんなシステムも役には立たないでしょう。

**参加者** 内面的な行動は想像で考えて、それをエチュードで確かめるということでもいいのでしょうか？

**ジェノヴァチ** その通りです。しかし、行動を考える時には常に身体的行動と内面的行動の両面で考え、一本化することが大切である。内面行動だけを



追ってしまうと、行き詰まってしまうことが多い。しかも身体的行動の方が見つけやすく、それを通して内面的行動が自動的に発動され、それを発見できることも多い。身体は内面世界に多くの影響を与えることは科学的にも証明されています。

故に、即興つまり身体的行動を通してエチュードを行うことが大切で、そうすれば内面でも行動や感覚、感情、行動、欲求を発見できるでしょう。

**参加者** ロゴージンはマイシュキンを憎んでいると言っていたが、それだけではなく相反した感情もあるのではないかと、だからより辛いのではないかと思うのですが。

**ジェノヴァチ** 私もその通りだと思います。人物たちはそれぞれ相矛盾する感情を持っているし、憎しみの感情は愛の感情によって支えられている。しかし重要なのはシーン全体として考えるということです。シーンで大切なことの一つは、「どこから始まり、どこで終わるのか？」ということです。そのコントラストが始まりと終わりであればある程に興味深い。このシーンの最後にはマイシュキンとロゴージンは義兄弟になる。それならば始まりは憎しみから始まる方が面白い。それにその理由は確かにある。ロゴージンは今のナスターシャとの関係においてマイシュキンは恋敵であり、憎しみの対象でもある。

**「度を失っている様子だった～おれにはわからないよ…」パルフォンはつぶやいた。」**

#### ・この場面で起こったことは何でしょう？

どうしてロゴージンが愛想悪くイライラしているのだろうか？

マイシュキンが見た目は本当にロゴージンの目だったのか？ 多くの回答を考えて、一番面白い答えを選びましょう。

もちろんマイシュキンを見張っていたのでしょう。

彼は汽車がつくたびに毎回、マイシュキンが来ることを恐れ警戒し見張っていた。マイシュキンは病を患っているのもあり、感受性がとても強く、ロゴージンの感情はとても強烈なので、その眼差しはマイシュキンに伝わった。

では、何故かれはマイシュキンに見張っていたことを隠して一層苦しむのか？

彼はマイシュキンを待ってもいた。しかし同時に彼と接触することも恐れている。

#### ・ロゴージンはここで何を望んでいますか？

マイシュキンから自由になること。(外国に行くか？=自分たちから去ってほしい)

#### ・マイシュキンは何を望んでいるのか？

行動には常に相手の反行動が必要です。その根底には常に闘争・戦いがある。その方がより鋭く面白いものになります。

マイシュキンはロゴージンにとっても会いたくて彼を探して来た。いろんな話を聞いた。その真相を知り、自分たちの緊張関係を和らげ和解したいと

思ってきた。

つまり2人の相互行動は互いの内面を一層発展させる、相反した対立するものなのです。

**ジェノヴァチ** ここまでがこの場面全体をいくつかの断片に分割した場合の1つ目の場面です。場面の名は、「ロゴージンとムイシュキンの思いがけない出逢い」。

場面には1つの主要な「事件」が起こり、そのまわりには4～6個程度の「出来事」がある。この出来事とはそれまでの人物間の関係性を変えるものという意味です。

その数個の出来事は連続的に鎖で繋がっていて、1つ目の出来事は2つ目の出来事を生み出し、2つ目の出来事は3つ目の出来事を生み出します、あとは順々に。

1つ1つの出来事のエチュードを作り、最後に始めから終わりまでをまとめて演じる。その時には出来事と出来事の繋ぎ目が見えなく、全てが一体化し、1つ状態から2つ目の状態へ、そして3つ目へと自然と移り変わっていくようにしていくのが良い。

**「彼の顔には愛想のいい～なんだってそんなことをきくんたい？」**

ここまでの場面で2人の関係は少し変化してきている。

・何がここで起こっているのか？

先ほどの激しい出会いの後、ムイシュキンは、親しかった頃の関係に戻そう近づこうとしている。それがこの断片での彼の目的です。対して、ロゴージンはムイシュキンが何の目的でここに来たのかを探りたいという目的がある。

**「～おれしだいじゃないってことぐらいわかっているじゃないか？」**

・ここでは何が起こっているのか？

2人は近づき合おうと思っているが互いにその障害に手こずっている。ムイシュキンはそれをとても望んでいるが、ロゴージンは彼に対して疑いを拭き切れないでいる。

・この空間についての情報

彼の部屋は物がとても多く、まるで空気が少ない空間のような印象がある。

・ミザンセーヌについての情報

ロゴージンがムイシュキンを自分の部屋の中心に座らせること。このロゴージンの行為の意図も、ムイシュキンの内面を観察し探るためである。

・新しい情報として

ソロヴィヨフの歴史本はロシアの歴史書の中で最も優れた本の1つで、もちろんこれはナスターシャが彼に教養を与えようと薦めた本である。

**ジェノヴァチ** ロゴージンの家系は旧教徒派に属しているということ、それは新しいことに対する拒否という考えがある。ロゴージンは暗鬱な暗い情熱の強いロシア的な人間、それに対してムイシュキンはスイスから来た人物で、新しいヨーロッパの影響を受けた現代の人間である。つまりこれもこの2人の人物の対極性の表れの1つである。

**「 ~ずいぶん長い間あなたに会わなかったからなあ 」**

・ここでは何が起きたかの？

ムイシュキンは何のためにここに来たのかを説明しようとした。そしてそれを終え帰ろうとした。ロゴージンに引き止めて貰うことを誘った挑発行為ではないだろう。

つまりこの場面の出来事は「ムイシュキンの（心を開いた）告白」であり、それがロゴージンの心を開いたのです。

ムイシュキン公爵は男性としてナスターシャを所有したいと思っっているわけではない。それでいてナスターシャを愛している。つまり彼の愛はエゴイスティックなものではなく、彼女からは何も求めている。ロゴージンにとっての愛はそれとは違い所有欲である。

**ジェノヴァチ** ドストエフスキーは愛という感情のパラドキシカルな側面を描いています。愛の明るい面とエゴイスティックな暗い面を。

・ムイシュキンは何を願っているのか？

ロゴージンを安心させること。

ロゴージンには友達はいない。兄弟とは話しあえるか？ 争い合っている。話し相手は誰もいない、競争相手と話すしかない、というパラドキシカルな状況がある。

この公爵のモノローグは、勿論ロゴージンとのダイアログである。彼の沈黙や仕草や身体行動が公爵の言葉を引き出し生み出している。

**ジェノヴァチ** 聞き役のロゴージンの演技がうまくいかなかったら、その時はロゴージンの内面のモノローグを作って稽古することが役に立つ。すると公爵はロゴージンの心の声を良く捉えながら話を進めていることがわかるでしょう。つまり、公爵の言葉が生まれてくる動機をロゴージンに見つけ明確にしてダイアログにすることが大切です。稽古ではロゴージンも言葉を発し、その後公爵が発し、そしてまたロゴージンがと演じてみることもとても役立つでしょう。

**「 ~そんなばかなことが！ 公爵は叫んだ。 」**

長い断片ですが、ここで進んでいる行動は1つです。

公爵の告白がロゴージンの告白を生み出しました。

### ・ロゴージンの不安の元は？

...

### ・では、彼の話の中で起きた最も大きなことは何でしょう？

彼がナスターシャに手をあげ、暴力を振るったということです。

**ジェノヴァチ** では、何が彼をそうさせたのだろう？ 彼はナスターシャが自分だけに属することを願っていることはもう分かっていますね。彼は行動の人で、彼女に暴力を振るった。しかし、それをしてしまう理由があったはずです。

### ・ナスターシャという人物について考えてみましょう。

**ジェノヴァチ** いったい彼女を動かしているもの、その動機は何なのか？

これを見つけるのは難しいがとても大切です。何故なら、彼女の振る舞いが男たちを動かしているのです。この人物にとっては何が幸せだろうか？を考えることが、その人物を動かしている原動力（動機）を知ることにつながります。

### ・公爵にとっての幸せは？

ナスターシャが幸せになることです。自分の幸せは考えていません。

### ・ロゴージンは？

ナスターシャが自分のものになることです。

### ・では、ナスターシャにとっては？

彼女は孤児でトーツキーに養われ、12歳の時にその男に侮辱された。それ以降に男はいなかった。彼女は愛を探し求めているが見つからない、完全に自分を満足させてくれるものはいないんです。

もし彼女の苦しみの源が「自分が汚された、墮落した女だ」と思ってしまうことだとしたら、演じるにも悶々と苦しむだけで魅力的ではないし、それに振り回される周りの男性もどこか愚かしい。

そうではなく、彼女は愛を探している、しかし彼女の悲劇は彼女自身が愛することが出来ないということなのでは。それはかつて過去に激しい侮辱を



受けてしまったから。

彼女は男を誘惑もしていないし、寝てもいない、ただ男たちの中に愛を探していると。

まだ確信ではありませんが、私はそこに彼女の謎を解く鍵があると思っています。

愛を探すが見つけることが出来ない、その探求を押しとどめることができない。1つのパラドキシカルなことが起こります。ロゴージンは殺人者ではなく救済者なんです。彼女自身は出口はなく、死を求める瞬間があると。

それが私の今のところ考える最も面白い仮定です。

彼女は不幸せになるように運命付けられている、何故なら彼女は侮辱を受けてしまったからです。

## 「～静かに言った」

### ここで起こったことは？ つまりロゴージンがナスターシャを殴った後に起こったことは？

ロゴージンの挑戦：ロゴージンとナスターシャの2人の戦い

ロゴージンは自分が変わるのではなく、ナスターシャが変わることを望んだ。

それに対し、ナスターシャは過去の同じ出来事の本を読ませることで、許しても許さなくても何も変化するものはないということを伝え理解させようとした。

**ジェノヴァチ** ナスターシャにはロゴージンとの結婚を引き延ばそうとする目的があった。ドストエフスキーのこの物語全体のテーマの1つ、それは「人は他人の罪や過ちを理解することができるのだろうか？ それを許し、愛することが出来るのだろうか？」というものです。ムイシュキンはこの物語の中で、癲癇の度にこの世の真実を悟っていく。しかしそれは病という代償を払いながら。つまり、代償を伴った真実です。真実を得たが故の代償です。

◆ ◆ 二日目終了 ◆ ◆

## 3日目 7月17日（金）

### 【 前日のワークショップへの質疑応答 】

**参加者** ムイシュキンの「結婚はここであげるつもり？」はこの家でという意味ですか？

**ジェノヴァチ** 現実的にこの家でという意味ではない。ペテルブルクでということ。  
重要なのはロゴージンにとってこの質問が不意を突く質問であったということです。

**参加者** 物語の時代特有の事物について俳優は知っておく必要があるのか？

**ジェノヴァチ** 演出家の着想次第だが、知っておいて損になることは何もない。

#### ・昨日の終わった場面について

ロゴージンは今や自分の告白を最後までしてしまいたいと思って熱に覆われている、対してムイシュキンはその告白を聞くことに気まずさを感じ去ろうとしている。求めてきたのは彼の方なのに、今やロゴージンの方がムイシュキンを必要としている状況に変化している。

なぜそんなにロゴージンが話したいのかというと、彼はナスターシャを理解したいのだけど、決して理解できないから。

#### 「～しっかり固まってしまったようであった。」

この場面で公爵はロゴージンがナスターシャを殺してしまう可能性について話します。他の場面ではナスターシャが同じことをロゴージンに言います。これはまるで意図せず他人にその行為を最終的にさせてしまう、何か後押しのような作用を逆説的に生んでしまいます。

公爵は常にナスターシャの振る舞いの動機や真実を探ろうとしているが、ロゴージンは常に自分のナスターシャへの愛の熱情を語ろうとしています。

2人は理解し合えていない状況です。その証拠に、公爵はロゴージンを傷つけたいわけでも、怒らせたいわけでもないが、「彼女は二度も君の元から逃げ出しているのを見ると最終的には君に殺されるかもしれないね」という酷いことを彼に言ってしまう。

ナスターシャはロゴージンの妻になる準備をしているように見えるが、これが嵐の前の静けさだということを2人とも知っています。

これは私の意見ですが、ナスターシャは無意識的にですが死を求めている部分がある。しかし自分で自分を殺すわけにはいかないのです、故にロゴージンに惹きつけられる面もある。ムイシュキンは決して彼女を殺すことは出来ません。その意味ではロゴージンは自分の為に彼女を殺したのではなく、彼女を更なる苦しみから救う為に殺したということもできる。

**参加者** それなら、なぜナスターシャは自殺できないのでしょうか？

**ジェノヴァチ** 彼女自身は愛を探し求めたいと生きているからです。そしてそれを掴み、生きたいと思っています。彼女は自分で、その追求を止めることはできない。誰か他の人がそれを止めるしかできないのです。しかし、その不可能性が彼女を苦しめているので、それを止めるのをあくまで無意識下で求めているという意味です。

#### 「～こっちだ、こっちだよ。いっしょに行って、教えてやるよ」(3章の終わりまで)

この場面で大きいことはナイフのテーマです。



なぜロゴージンが「ナスターシャが本当に愛しているのは君だ」と公爵に言った時に、公爵はひどく動揺したのか？ そしてナイフをいじるのか？

これは公爵が何かを予見した瞬間だと捉えることができるでしょう。彼は手にとってそのナイフを見たいという衝動に駆られます。ロゴージンもその行為に苛立ってきます。公爵は気分が悪くなりここを立ち去りたいと思います。

公爵はロゴージンを怖くなったのです。彼はロゴージンが自分を敵だと思っているということを悟ります。そしてロゴージンも公爵が何を捉えているのかを理解しています。これはページを切るためのナイフではないという。

ここへ来て、このシーンまでのロゴージンの行動と振る舞いの謎が明らかになります。公爵の訪問の真意は「犠牲者が向こうからやって来た」という出来事だったのです。つまりここで起こる事件は、ロゴージンの中に無意識に生まれた「ライバルの公爵を殺害する」という考えが明確になり、それを2人が意識的に理解したということです。

これが3章と4章の最大の事件です。つまりこの事件の前後で行動が変化します。4章ではロゴージンはムイシュキン公爵を殺さないですむようになることを目的にして行動しています。十字架を交換して義兄弟になろうとしたのも、それによって公爵を殺さないですむようにする為です。

このように全ては事件から発生しているのです。事実を基にして事件を正しく把握すれば、人物が何をしているのかを見つけることができます。つまり舞台上俳優が何をすればいいのかを知ることができる。何を喋ればいいのかではなく、どんな行動をすればいいのかを知れます。これはセリフを追っていたのでは決して見つけることが出来ません。常に事件に最大の注意を払って、物語に向き合うことが大切です。

大切なのは事件を基にして分析を進めていくことが大切で、1つや2つのセリフの解釈を探し求めていくのではない。そこに囚われてはいけません。事件のみが人物に（俳優に）行動を与えてくれます。

**「～握りしめながら言った。」**

**・ハンス・ホルバインの絵について**

十字架に磔にされたキリストの絵は感動的に美しく描かれていることが多いが、この絵は違います。孤独なキリストが描かれています。神が人間に神を信じさせるために遣わせた息子＝キリスト、その目的が叶わなかった神の敗北というテーマがこの絵にはあります。

**「～こんなすばらしい話はねえよ・・・」**

**・公爵の話について**

ロゴージンは、少しでも早く公爵と別れたいと思っている。

公爵は、このままでは別れられないと思っている。ナイフが出てくる前の信頼しあった仲に戻そうとしている。

ロゴージンは公爵の話に自分と近い状況を感じ、自分の高まった緊張を解くために笑うのです。時計は、彼らの場合つまりナスターシャです。

この話をしてくれた公爵に感謝している。

「～階段をおりていった。」

・公爵がこの話でロゴージンに与えたものは何でしょうか？

公爵の話の内容は、この世の中で人が何の罪も犯さずに生きることは不可能である。しかし人間であり続けるために大切なのは、その罪を悔い改めることである、ということ。

神への信仰というのは人間の血の中にあるもので、打ち消し難いものであるというのが公爵の信じていることです。

この考えがロゴージンを打ちのめし、犯す前の罪を悔い改め、自分が時計のために友を殺した老人にならないように行動しようとする。

十字架を交換した後でも何かはまだ十分じゃないと思ったので、ロゴージンを母の元へ連れて行こうと思った。

ロゴージンの母は、ボケてしまっていて普通は人に会わせるのは恥ずかしいものだが、公爵なら笑ったりしないだろうと信じて。

「～ぱたんとドアを閉めてしまった。」( 4 章の終わり )

場面の状況は、夫の喪中である。

ロゴージンの母は子供に返っている。

・ここで何が起こったか？

ロゴージンが公爵を殺すという考えを拒否した。ナスターシャへの愛はもういいと言って。公爵を競争相手じゃなくするために、彼にナスターシャを与えた。激情的に。

・この 3、4 章で全体で起こった出来事の本質は

ロゴージンはムイシュキンを殺そうという意図を持った。しかしこの意図を最終的に拒否した。ナスターシャへの愛を否定することによって。それは彼にとっては狂気のような振る舞いであった。ということです。

この場面は作品全体のクライマックスでもあり、最も重要な場面でもある。

【 明日から取り組むエチュードについて 】

- ① 2 人の思いがけない出会い
- ② 2 人の近づき
- ③ 2 人の告白
- ④ 2 人の義兄弟の誕生

**ジェノヴァチ** みなさんが挑戦するエチュードはこの場面の中心的場面である上記 4 つのいずれかでも、その中にあるもっと小さい部分でも良いです。

とにかく自分の好きな惹きつけられる部分に取り組んでください。

大切なのは、何が事件として起きたのか、起きているのか？ この事件を何を通して表現するのか？ 空間、ミザンセーヌ、照明、衣装も考慮して。

みなさん何も恐れなくてやってみましょう！ リハーサルをしておいてください。

.....

記録 杉山剛志